

真夜中のボタンつけ

竹森 恵累たけもり えゑ

「ただいまー。」

私は真つ直ぐダンスの方へ向かった。なぜかという、私のお気に入りのワンピースのひもの長さを調節するボタンがとれてしまった。だからお母さんに仕事が終わったらボタンをつけるようにたのんでいた。けれど、ボタンはついていなかった。

「なんでつけてくれなかったの。たのんでおいたじゃない。」

私は言った。するとお母さんは、

「そんなに言うことないじゃない。私には時間がなかったのよ、時間が。」

「いつもいつも、時間時間って。時間ぐらいあるでしょ。私の服より自分の時間の方が大事な。お母さんなんて大っきらい。」

そういつて私はいやなことがあつたら行く2階へ行つた。

そこでしばらくすごしていた。こっそりのぞいてみるとお母さんは静かに、夕飯のしたくをしていた。夕飯の時もお母さんとは一言も話さなかった。ねるときもお母さんは、何も返事を返してくれなかった。

朝起きると、なんとボタンがついている、ワンピースがあつ

た。その横にはねむっている母のすがたがあつた。私は悲しい

ような、うれしいような気持ちになった。うれしいのは、ボタンがついているからであり悲しいのは自分でもなぜだか分からなかった。そうこうしているうちにお母さんが起きた。私は、

「ごめんなさい、お母さん。そして、ワンピースのボタンつけてくれてありがとう。」

すると、お母さんは、

「こちらこそ、言ひすぎたわ。ごめんね。」

私はお母さんにだきついた。そうだ、今思い出した。お母さんは、私が帰ってくる前に仕事から帰ってくるんだ。仕事が終わつたばかりでとてもつかれていたから時間が言ひつて言ひつていたんだ。なのに、私はあんなにひどいことを言ひつてしまつたんだ。

「ごめんなさい、お母さん。ごめんなさい。」

私は泣きながら言ひつた。仕事でつかれているのに休む間もなく夕飯のしたくをしていた。そんなお母さんに感謝の気持ちを伝えたかつた。そして、私は言ひつた。

「いつもありがとう。お母さん。」